

Alan Boothの徒歩日本縦断記 *The Roads to Sata* について¹

関田 敬一

1

アラン・ブースが書いた『縦断記』は明るくて楽しい本である。ブースは日本と日本人を納得のゆくまで知ろうとしたのである。それが日本で最北の稚内から鹿児島
の佐多岬まで歩くという旅行になった。宿泊施設には予約を入れないで、もしも宿
が見つからない場合には野宿をするという冒険の旅である。リュックには寝袋を入
れている。それは東京に代表される都市生活にはない日本を知るための旅である。
そして経済発展の陰にかくれてしまった日本人の生活を記録することとなる。ブー
スの文章には懐かしい日本の風景や人々の生活がたびたび現れる。われわれにとっ
ては当たり前のことであっても、イギリス人であるブースを通して語られることで
新しいものとなる。それはラフカディオ・ハーンを思い起こさせるだろう。ブースも
ハーンに負けず日本を好きになり夢中になった外国人の一人であるに違いあるまい。
しかし両者における違いは、ハーンの時代が明治であることに対し、ブースは敗戦
後の日本ということである。彼は外国人の姿少ない広島市の平和記念公園を訪れる。
そこでこの旅でもっとも苦しい思いをするのである。原子爆弾の悲惨さに関する記
述をこの本の中に入れることは初めからブースの頭にあってであろうと思われる。
『縦断記』は全体として大胆で楽しい旅行記の印象を与える一方で、細やかな配慮
がなされていて味わい深い本となっているのである。日本に関する英文の旅行記と
して傑作といってもよいであろう。

さて『縦断記』が愉しく感じられる理由のひとつは全体に散りばめられたブースのユーモアである。旅を始めてまもなく泊まった旅館の主人は、小学校の教師もつとめている。そこで小学校の教室へと案内されることになる。1年生が3名、2年生が1名のクラスである。ブースは自身のことを“the Thing from Outer Space”であるとして、先生と生徒の会話を記録し始める。

“Now, children, here’s an Englishman who comes from England. Do you know where England is, Kazuko-chan?”

“*Zutto muko* (far away).”

“And do you think you can find it on our map?”

A battered metal globe had been dragged out to the front of the class and the four children clustered round it, wriggling.

“No, Kazuko-chan, that’s Saudi Arabia. This is England,” said Mr. Obata, tapping Iceland. Mr. Obata rocked back on his heels as he addressed his four pupils, gesturing at them with large sweeps of his arms.

“Now, yesterday this foreigner walked thirty-three kilometers, all the way from Cape Soya. Where’s Cape Soya, Kazuko-chan?”

“*Zutto muko* (far away).”

“Yes, and today this American is going to walk to Toyotomi. Where’s that, Ryoichi-kun?”

“*Zutto muko*.”

“And after that he’s going to walk all through Japan.”

“Ooooooooo!”

“How long do you think that’ll take him?”

“A week.”

“Two weeks.”

“Six months.”

“Five years.”

And by this time my feet were beginning to tingle, so after the children had each tried to lift my rucksack (the little girl was the only one who succeeded), I drank a cup of thin green tea in the teachers' room, while the headmaster guffawed quietly at his desk, and then set off in earnest for Toyotomi. (P.8)²

“*Zutto muko.*” と繰り返す子供はユーモラスであるが、それだけではないのだ。Obata先生はイギリスとアイスランドを間違えてしまうばかりか、イギリス人であるブースは、いつの間にかアメリカ人になってしまうのである。そして校長先生については、無能に違いないと思わせるかのように大笑いしているのである。このような表現にはだれもが思わず苦笑してしまうことだろう。自分もObata先生も生徒たちも校長までも笑いにしてしまうところは見事である。しかしながらコメディとして整いすぎると、実際の旅行中の出来事ではなく創作ではないかと感じさせてしまうかもしれないであろう。そこで少女だけがブースのリュックを持ち上げられたという偶発的なエピソードを挿入することによって、リアリティとのバランスを取っているようにも感じられる。少女だけがリュックを持ち上げるのはユーモラスでもあるが、現実生じたハプニングの感じがするのである。ブースがこの『縦断記』を愉しい本にしたいと願っていることは、このような話を旅のはじめに入れたことや子供たちとの交流を多く書き込んだことから感じとれるのである。

子供たちのその予想外の無邪気な言動はとりわけユーモラスであることが多いものである。子供には可能であるが大人には不可能なことも多々あるのだ。子供は大人と違い素直に外国人に関心を示すものである。留萌の高校生がブースに声をかける。

Rumoi seemed a lively enough city, I thought, though curiously subdued in the early morning when I left it, striding off at the beginning of the tenth day of my journey past empty coal trucks and rows of uniformed high school pupils, the girls babbling excitedly in their neat full-skirted sailor suits, the boys in their shiny black blazers and geta, dragging their satchels along the railings by the roadside

and waiting till I was well past before shouting out, "Hey, yooo!" (P.20)

どこで覚えた英語であろうか、いきなり "Hey, yooo!" である。海外の読者ならば日本の英語教育はどうなっているのかと首をひねるのではないだろうか。実際にはブースを見て恥ずかしがって下を向いてしまう子供もいたであろうと思う。しかし旅行の始まりにブースが書いている子供たちは内気なタイプではないのである。外国人に言葉をかけるというのは、それが茶目っ気によるものであろうとも、交流を求めていることにほかならない。英語を習い始めた年頃の子供たちがブースに声をかける。

"Ziss is a PEN! Ziss is a PEN!" screamed the children as I walked into the city.
(P.19)

このように書かれると読者は愉快になってしまう。しかし英語をまだ習っていない幼い子供たちはブースに容赦がない。

Four little boys on bicycles escorted me into the town of Numata at five o'clock in the afternoon and made me stop to look at their pictures of *suupaa-kaa* ("supercars").

"What *suupaa-kaa* do you have in England?"

I felt boastful: "Oh, you know...Rolls Royces...Jaguars..."

"Is that all?"

"Well, er...there's...er...Aston Martins..."

"It's a shame he's not an Italian. *They've got Lamborghinis.*"

And with that accusation ringing in my ears, I was shown to a ryokan and promptly abandoned. (P.21)

大人とは違い子供は外国人に対する精神上的の垣根が低いのであろう。このような

子供たちとのやりとりについての話題は全体にわたって見られるが、特に旅の始まりに多くて全体の調子の方向づけをしているのである。ブースにとって、旅行とは基本的に愉しむべきものなのである。そして旅行記についても、それを読む人を同じように愉しませたいと考えているのである。

日本滞在7年でブースの日本語はかなり上達していた。旅行中の日本人との会話は日本語を用いていたと考えられる。そして日本語で困ったという記述はないのである。ブースは書いていないのであるが日本語習得の努力をあらゆる方法でしていたに違いあるまい。三沢や広島で出会うアメリカ人が日本に何年も滞在しながら、一言も日本語を学ぼうとしないことに対して、批判的な態度をのぞかせるブースなのである。この旅において見られるようにブースの日本語の習得方法の特徴は、実際に日本人に対して積極的に日本語を使ってみることである。そして文学、歴史、地理など総合的な関心を持っていることも明らかである。『縦断記』中には、斜体字になった日本語のローマ字がしばしば出てくるのだが、これは外国からの旅行者に日本語を学ぶように促す働きをするだろう。ブースは子供たちを日本語を用いて追いついてみせる。

My eleventh day opened on a cloudy sky and four more little boys who pursued me on bicycles, screaming “*Gaijin! Gaijin!* (Foreigner! Foreigner!)” When they had overtaken me, they blocked my path with their bicycles and stood scowling up at me open-mouthed: “*Ufu! Mite! Eigo no hito da!* (Ugh! Look! It’s an English-speaker!)” I suggested to them in Japanese that they might like to move their bicycles. They turned away, crestfallen: “*Ara! Eigo ja nakatta!* (Oh! It wasn’t an English-speaker!)” (P.23)

ブースにとって関心の中心は人間である。したがって老人にも関心をよせるのである。子供たちとのやりとりの多い部分にも、老人を観察している話が入る。子供たちはこれから人生を歩むのだ。したがってまだ人生を知らない。老人によってのみ人生の意味を知ることができるのだとも言えよう。

In the back of one little shop I stopped in there was a woman with a smile so astonishingly lovely that it shot off her face like a beam of light. I glimpsed her while I was buying an apple. She was very tiny and had a grotesquely hunched back, and she sat in front of a huge electric knitting machine that someone had bought her as a present; a brand-new electric computerized knitting machine—slip in a card and out comes a cushion cover. I don't think I have ever seen anyone look prouder than that little hunchbacked woman sitting there smiling at me, wanting me to notice her knitting machine. (PP.15-16)

ブースの表現の特徴として言えることは“a grotesquely hunched back”のようなリアリズムを入れていることである。ブースの文章からは、おもに優しさを感じ取れるのであるが、優しさではないものがある。それがリアリズムであり、拮抗する両者が緊張感をもたらしているのである。文章が詩的で美しいと思う。この老女は何故コンピュータ制御の編み機が誇らしいのだろうか、それを初めて会ったブースにまで何故自慢して見せるのか。人間が生きているということは、孤独であるという事実をあらわしているのであり、そこには認識の相違があるだけである。それをよりはっきりと見ることのできるのは都会よりむしろ田舎であろう。老女が他者とのつながりの証拠である編み機を誇らしく思っていることは、ブースにそれ以外の老女の孤独な時間を想像させてしまうのである。

There was a lull in the rain on the seventh day and I walked along the still empty coast road and saw an eagle ripping the guts out of a crow. On the main street of one village, an old woman in a dark kimono with a scarf round her head and no teeth in her mouth came up to me and, to my amazement, put her arms round my neck and, when I had bent down to her, put her cheek against my cheek and asked me where I lived.

“In Tokyo,” I said, and she hugged me as tight as her shaky little body would let her.

“I have three grandsons in Tokyo,” she said. “Three grandsons. Thank you. Take care. Good luck to you.” And she patted me on the back, twice, smiling and then sighing, and the rain came down again and I walked on toward the snowy mountains. (P.16)

美しい老人は孤独に耐える力をもっている。鶯がカラスを食している光景は、暗色であり、そしてこの老人も暗色の着物をまとっているのである。両腕をブースの首に回して、相手の姿勢を低くさせながら語りかける様子は、まさに老人を描き出して見事である。鶯がカラスを食らう描写に負けない表現であるといえよう。その結果、自然界の真実と老人の真実とが不思議な均衡感を保っているのである。

2

私がアラン・ブースという名のイギリス人を知ったのは、Lonely Planet社の *Japan* (2009)によってであった。その英文旅行案内のTravel Literatureの項に“Travel books about Japan often end up turning into extended reflections on the eccentricities or uniqueness of the Japanese. One writer who did not fall prey to this temptation was Alan Booth.”とあって興味をもったのである。読んでみると、なるほど個性的な魅力のある本であると思ったのである。そして和訳『ニッポン縦断日記』の出版もあって、日本においても愛読者が少なからずいることを知ったのである。³ ブースの『縦断記』の魅力とは何かと考えていたところ、いろいろなことが言えそうだと思います、まとめてみる次第である。

ブースの略歴を述べてみる。1946年にロンドンに生まれる。10歳の頃にはシェイクスピアをすべて読んでいたと言われる。パーミンガム大学で演劇を学ぶ。シェイクスピア・センターにて役者兼監督を務める。儀式としての演劇への関心から、日本の能に関心を持つようになり、1970年来日する。しかし興味は日本そのものへと移り、居を日本に定めて作家となる。映画批評から社会・政治にわたり広範囲な文筆活動に手を付けたが、1993年に結腸癌にて47歳で亡くなる。

『縦断記』の初版は1985年であるが、実際に徒歩旅行が行われたのは1977年のこ

とで、ブースが30歳、来日7年目である。行程は、梅雨がない北海道の宗谷岬から南に向けて6月29日に歩き始めたと記されている。そして終着点の鹿児島島の佐田岬に到達したのは11月3日のことだから、全行程に4ヶ月と5日を要したことになる。ブースの足跡を辿るために日本地図が載っていて、大雑把に見れば、宗谷から佐田までの最短距離を歩いたように見えるのだが、拡大図の掲載があるのでさらに確認してみると、直線ではなくてギザギザになっていて同じ道を行き来したりしている。宿泊場所を探さなければならなかったブースにとっては仕方なかったことだったのである。それでも宿が見つからないときのために、野宿用の寝袋だけはリュックに入れている。後にブースの『縦断記』を読んで影響を受け、ブースとは反対に佐田から宗谷へと歩き、もうひとつの『縦断記』を書くことになったMcLachlanは、リュックに小型テントを入れている。⁴ マクラクランの文章にはブースのような宿探しの苦労話が少ないのだ。宿が見つからないときはテントを張っている。予約のない宿泊とは、泊まろうとする者だけでなく泊める側も心配して気を遣うのである。宿泊するのは観光地にあるような大きなホテルではない。そのうえ外国人である。ブースには書かれているより多くの苦労があったであろうが、宿探しをする話がブースという個性的な人間に語られることによって、機知に富んだ表現で楽しいものにかわり、旅行記の魅力を増しているのは事実である。宿泊を断る宿側も責められていない。リュックを背負う外国人がいきなりあらわれるとすれば、不信をいだくのも当然とブースは慮る。ブースの人間性が感じられるのである。

鶴岡の手前の温海でブースと宿屋の女性が泊めるか泊めないかについて不思議な会話をしている。

Dusk came on fast and at half past six it was night. In the village of Atsumi the woman at the ryokan door stood twisting her apron about in her fists.

“Are there any rooms free?” I asked with an encouraging smile.

“Well, yes, there are, but we haven't got any beds. We sleep on mattresses on the floor.”

“Yes, I know,” I said. “I've lived in Japan for seven years.”

“And you won’t be able to eat the food.”

“Why, what’s the matter with it?”

“It’s fish.”

“I like fish.”

“But it’s *raw* fish.”

“Look, I’ve lived in Japan for seven years. My wife’s Japanese. I like raw fish.”

“But I don’t think we’ve got any knives and forks.”

“Look...”

“And you can’t use chopsticks.”

“Of course I can. I’ve lived in Japan for...”

“But it’s a tatami-mat room and there aren’t any armchairs.”

“Look...”

“And there’s no shower in the bathroom. It’s an *o-furo*.”

“I use chopsticks at home. I sit on tatami. I eat raw fish. I use an *o-furo*. I’ve lived in Japan for seven years. That’s nearly a quarter of my life. My wife...”

“Yes,” moaned the woman, “but we can’t speak English.”

“I don’t suppose that will bother us,” I sighed. “We’ve been speaking Japanese for the last five minutes.” (P.108)

ブースが宿探しの苦勞を書くのは温泉についてだけではない。なかでも印象的なのは福井県、南越前町の河野において部屋が空いていないと宿泊を断られる時である。その様子から疑いを持ったブースは宿のマッチをもらって、少し離れた公衆電話から宿は空いていないかと電話する。空いていることを知らされるブースは、怒りをあらわにせず、そっと受話器を戻している。しかしその後もあまりに失礼な断り方をされ続けたので(P.165)、さすがのブースも怒りおさまらず、ようやく見つけた宿で行政の長への意見書を書き記すのである。しかし結局、破って灰皿に捨ててゆくのである。ブースは有名な週刊誌の名をかたり、この旅で福井県のもてなしについ

ての記事を書いている、もし宿泊を断るなら、あなたについて個人的な記事を長々と書くことになると言い張って一夜の宿をかりうじて得る。地名を出された河野にとっては不名誉なことかもしれないが、ブースの対応はここでも見事なものである。

しかしどうしても泊まることのできる場所が見つからなくて、野宿をしたことが2度ある。支笏湖のキャンプ場の管理人とのやりとりである。

“Do you mind if I sleep down there on the beach?”

“You can if you want.”

“I haven’t got a tent.”

He was lighting a cigarette. “Haven’t got a tent?”

“Will I have to pay?”

The old caretaker squinted at the pack on my back.

“I’ve got a sleeping bag.”

He shrugged, said nothing, and went back into his hut. (P.38)

夜半、突如雨が降り始める。それが大雨となり、びしょ濡れのまま管理人の小屋の軒下に避難する。その時の管理人である老いた男性の様子を書いている。

A light went on in the hut. Though the condensation on the window I could see the wood stove the old man had burning. I saw his shadow move across the dry wall and watched him peer out through the lighted window and stare at me lying on his step. Then I heard him move to the door. The door opened a little and, by turning an inch, I could see his face silhouetted in the doorway. He stood there for what seemed a very long time and I tried to think of something to say, but in the end, I was spared the necessity of saying anything. Quietly but firmly he closed the door of his hut and turned the key in the lock. (P.39)

相手が日本人であれば管理人小屋に入れてくれていたかもしれない。管理人も余計

な心配をしなかったかもしれないのである。そして明らかにブースの側にも相手を気遣うゆえの遠慮がある。もしも説明していたら中へ入れてくれただろう。しかし双方が大人であるからこそ相手を気遣いつつも超えられない一線があるのである。ブースという人間をより身近に感じるのである。“Sayonara”と言いおいてブースは旅を続ける。

新潟の柿崎においては、エピソードとしては全編で唯一の日本人の性に関する話が出てくる。(P.133)それはトラックの運転手と旅館の女中とのやりとりを淡々と記録したものである。ブースが歩いた当時の日本は、漫画におけるSMやポルノ映画のポスターや看板が巷に氾濫していた頃の日本である。ブースは子供たちの目に入るところに性の画像が溢れていることを度々記述している。しかしその書き方はブースらしくて、つまり高所からの批判ではなくて、日本の混沌をなつかしく同情と愛をもって眺めているかのような印象があるのである。

芭蕉は彩りをそえるために『奥の細道』のなかに糸魚川にて遊女と同宿したエピソードを入れたのだという説明がある。ブースはもちろんそのことを知っていただろう。徒歩で日本を旅するのに芭蕉を意識に入れられないわけにはいかないのである。本書の中にもたびたび芭蕉の名が登場するのがその証拠である。しからばとと思ってブースは色艶のある話を持ち込んでみたのではなかろうか。アラン・ブースが書いた『英語聖語読本』という英語における性表現を集めた本が出版されていて、ブースという人物の興味関心の広さには驚嘆すべきものがあるのである。⁵

3

天の橋立をすぎると、行路としては近道でありかつ安全なはずの鳥取へは進まずに、中国山地を抜けて引き寄せられているかのように広島へと向かってゆく。そして広島に入るやいなや(第8章)平和記念公園の話になるのである。

At the point where the atomic bomb was dropped on Hiroshima there is a Peace Park, and in the Peace Park there is a museum. I visited the museum with no illusions that I would be able to write about what I saw and little real hope that I

would comprehend it. The three hours that I spent there, forcing myself to look at every item, reading each caption in English and again in Japanese, brought me no closer to an understanding but they knocked a gaping hole in my spirit. (P.212)

この本は日本を歩いた記録だけではない。日本理解をこころみた証明なのだ。それゆえ原子爆弾について書くことから逃げることはできないのである。ブースには人に対する深い同情と共に正義感がある。彼のユーモアを喜ぶのは良いが、ブースのにこやかな笑顔に垣間見られる真面目さを見過ごしてはならないのである。

おそらく旅行の計画を立てるはじめより広島行きはその重要な目的のひとつであったのである。本文にもあるように、天の橋立から海岸沿いに鳥取へ向かうほうが楽であるのに、引き寄せられるかのように中国山地を抜けて広島へと向かうのだ。

たとえば北から南へ縦断するのではなく、マクラ克蘭のように南から北へ向かうとしよう。そうすれば広島は旅の前半の行程にはいることになるのである。ブースが広島で苦悩した様子は、ずっと後を引いて、読者をも同じ気持ちにさせてしまうであろう。広島は書かなくてはならないものだが、これは原爆反対のためのレポートではないのだ。自分が好きな日本、ほんとうの日本とは何か、複雑でわかりにくい日本、そして愉しい日本を知ってもらうための旅行記なのである。それが異なる印象の旅行記になってしまうことは間違いない。広島に行くと決めたことは、この旅行記が北から南に進路を取らなければならないようになった大きな理由のひとつであるといえるだろう。

その平和記念公園内で原爆被害の写真を見る際、ひとりの日本人に付きまといられることになる。

He said: "Your country did this."

My eyes must have altered behind my sunglasses. I slid away from him and stopped in front of a large photograph of a junior high school girl with half her face missing. I felt the same nudge and now the man was grinning.

"Do you like this picture?" he asked. "Do you find it interesting at all? Does it

amuse you? Do you find it amusing?" (P.213)

原子爆弾を作り出して広島に悲惨をもたらした責任は自分にあるかのように、ブースは沈黙してしまうのである。

広島平和記念公園の原爆の子の像は1958年5月5日に完成する。したがってブースが広島に到達したときにはあったのである。ブースはその時に見ていたはずである。しかしブースは佐々木禎子の名前をだしていない。世界に知られるようになった禎子の話は創作によるものもあるといわれるが、ブースはある少女の話として書いている。

There is a story told about a little girl who fell desperately ill some two or three months after the bombing. For a long time the exact nature of "A-bomb sickness" was only dimly understood, and treatment was haphazard and ineffectual. This fact, combined with the soaring black-market prices of foreign medicines in postwar Japan, condemned most of those who contracted radiation-induced diseases to an agonizing death. But the girl's mother was stubborn and resourceful and hung onto her wits far longer than most mothers would have. Patiently she persuaded her little daughter that if she could fold one thousand paper cranes and string them together like a rosary she would recover. Millions of these tiny cranes—the work of well-wishers and pilgrims—hang today in colored festoons from the stone monuments in the park, and it was these that the old man was arranging in heaps. The little girl began to make her cranes, but daily her fingers lost their strength, and eventually the sheer effort of folding them was a torture both to her and to her mother. Still her mother—by now, and of necessity, a believer in the myth she had concocted—stubbornly urged her daughter to fold another crane and then another, and painfully the little girl folded her cranes and one by one the number grew. She died after making nine hundred and sixty-four. (PP.215-216)

原爆の被害に苦しんだ可哀想な少女ひとりに、打ちのめされてしまうブースがいるのである。その苦しむ様子は、雨の中を歩いて宮島に至るまで続いている。

ブースはビールが好きで、アルコールにまつわるエピソードも少なくない。そして平和記念公園を訪れたあとでは泥酔するため労働者の街に出かけたことが書かれている。アルコールには精神の苦しみを和らげる働きもある。ブースは酒を飲んでいる時の描写が大好きに違いないと思うほど生き生きと書くのであるが、広島酒は苦い酒であったのだろう。泥酔するために出かけたと書いているだけである。(P.217)

アルコールにまつわるブースの話もとても愉快なのでエピソードをひとつ引いておこう。いきなり宴会にとび込み、宴会を盛り上げたあとの話である。

In the night I made the beginner's lavatory mistake. Whatever the style of Japanese lavatory—whether Western or the traditional hole in the floor—you never go into it wearing the same pair of slippers that you wear along the corridors. Another pair of slippers—often helpfully marked “lavatory” —is laid out for you there, and you change into them as you enter. The beginner's lavatory mistake is this: stumbling half-pissed into a hole-in-the-floor-type lavatory at night, he kicks one of the lavatory slippers down the hole. This, I suppose, happens fairly regularly, but for a veteran of seven years to commit this blunder was an immediately sobering embarrassment. In fact, it was so embarrassing to be left hopping about in a single lavatory slipper that I kicked that down the hole to follow the first. My plan was to disclaim all knowledge of the slippers so that the maid would be accused of having forgotten to lay them out. This, I congratulated myself, was a cast-iron defense, but in the searing light of morning it struck me that I might well be resorting unawares to an instantly recognizable “beginner's lavatory feeble ploy,” so I avoided not only the downstairs guests but the entire domestic staff as well. (P.88)

われわれを愉しませてくれる才能のある人を早くに失ったことは残念なことである。しかしながらブースの『縦断記』が今後も英文による魅力をもった日本旅行記として、多くの人々に読まれ続けていくことは間違いのないであろう。

注

1. 1997年よりKodansha America版が出る。アメリカの初版は1985年のWeatherhill, Inc.版。イギリスは1986年のViking版。
2. 括弧内はKodansha America 版による引用のページを記す。
3. 1988年に東京書籍より柴田京子訳にて『ニッポン縦断日記』が出版されている。和訳において割愛された箇所が多数みられる。
4. McLachlan の *Four Pairs of Boots* はJapan Publications Trading Co. より1998年刊。
5. アラン・ブース『英語聖語読本』英潮社 1977

参考文献

- Booth, Alan. *Looking for the Lost*. New York: Kodansha America, 1996.
Booth, Alan. *Japan: Land of Many Faces*. Chicago: Passport Books, 1988.